京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成25年9月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　経済学研究科

職 名・学 年　博士後期課程1年

氏　　名　森 本　裕

助成の種類	**平成25年度・ 若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成**	
研究集会名	国際交通経済学会年次大会 Annual Conference of the International Transportation Economics Association 2013	
発表題目	The effect of transport access improvement on agglomeration of tourism industry	
開催場所	North Western University Evanston Illinois, USA	
渡航期間	平成25年 7月 6日　～　平成25年 7月14日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■無　□ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空券　130,000円 学会参加費　70,000円 ＊不足分は私費を充てた
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 北米で学会発表をするには20万円では足りないため、助成金を増額していただければありがたいです。	

成果の概要／ 森本　裕

＜概要＞

私は平成 25 年 7 月 8 日から 12 日にかけて North Western University で開催された国際交通経済学会（Annual Conference of the International Transportation Economics Association 2013）で研究発表を行った。本学会では、世界 30 か国以上から 100 名以上の研究者が集まり、交通経済学に関する研究成果の報告をした。また、同時に開催されたサマースクールに出席した。

私は交通網と地域経済に関する研究を行っており、自身の研究成果を世界の研究者に発信するとともに、他の研究者から最先端の研究に関する情報を得ることを目的として、本学会に参加した。本学会参加における主要な成果を以下に述べる。

＜サマースクール＞

サマースクールでは、世界から 9 名の教授陣が集まり最先端の交通経済学の研究について講義を行った。直接自分の研究に関係ないものも含めて、幅広く交通経済学について学習することができた。また、統計ソフト STATA の実習もあり、今後の研究に活かすことができる技能を習得することができた。

また、コーヒータイムやディナーでは世界から集まった大学院生と交流する機会があった。私と関心を同じくする参加者もおり、研究について話が弾んだ。今後、共同研究を行うかもしれない同年代の研究者とのネットワークを築くことができた。

＜研究発表＞

私は 7 月 11 日の Agglomeration（集積）のセッションで The effect of transport access improvement on agglomeration of tourism industry（交通アクセスの改善が観光産業の集積に与える影響）の発表を行った。

本研究は、高速道路や新幹線の開通といった交通アクセスの改善が観光産業の立地にどのような影響を与えるのかを分析したものである。一般に、交通網が整備されると観光客が増加し、観光産業が活性化されることが期待される。しかし、現実にはすべての観光地が発展するわけではない。交通アクセスと観光産業の関係に関する先行研究は複数あるが、これらの研究には、観光産業に特有な事情を十分に考慮していないという問題点があった。そこで、交通によって輸送されるのが物ではなく人であること、観光客は対価を支払うことなく景観や文化などの観光資源から効用を得られること、といった観光産業に特有な事情を考慮したモデルを考案した。

このモデルを用いた分析の結果、①交通アクセスの改善前に観光産業が集積していた地域がアクセスの改善に伴ってさらに発展すること（逆に、他の地域は衰退する）、②大都市から遠く離れた観光地ほど発展しやすいことという結論を得た。

本研究に対して多くの意見をいただくことができ、今後の改善とさらなる拡張について重要な示唆を得ることができた。

＜その他＞

学会は互いの研究成果を報告し合い情報を交換する場であるとともに、研究者間のネットワークを構築する場でもあることが分かり、貴重な体験であった。コーヒータイムやディナーなど、研究者同士の交流を深める場も多く用意されており、それぞれの参加者が活発に他の研究者と交流を深めていた。私自身も積極的に他の研究者と交流を深めるように努めた。

また、アカデミックで必要な英語力が何であるかについても発見があった。英語を母語としない研究者は英語に堪能ではないことが多いが、英語が上手でなくても学術的に意義のある発表をすれば賞賛を得ることができる。当然のことではあるが、何よりも大切なのは研究と発表の内容であり、英語はそれを伝えるためのツールでしかないことを実感した。

＜謝辞＞

上記のように、本学会への参加を通じて多くの経験を積むことができた。この学会への参加を助成してくださった貴財団へ厚く御礼申し上げます。